

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・教授

氏 名：北村 育子

研究課題名：地域の福祉連携を促進する「暮らしのカフェ」の運営に関する研究

取り組み状況

福祉や医療の専門職と住民が知識やスキルを持ちより、ゆるやかに交流するなかで、住民がニーズを充足したり、福祉や医療の専門職者が横のつながりを形成したり、住民・専門職を問わず知識の幅を広げたり、専門職の援助の質を高めたりすることを可能にする方法を探ること目的として研究を行った。研究の実施にあたって、住民・専門職を問わずゆるやかにつながる場としてのカフェを、「食」をテーマとする6回のシリーズとして運営した。「食」は年齢や障害の有無を問わず生活と不可分であり、また共通の話題としても有効である。また高齢者の低栄養は従来から隠れた問題としてその存在が指摘されており、要介護状態となることを予防するためにも「食」を整えることは重要である。そして、要支援・要介護の高齢者の職を支援する第一線の実践者はホームヘルパーであり、カフェへのホームヘルパーの参加を促した。さらに食は、生まれた時から誰もが継続して整えるべきものであり、参加者が共通に話し、交流することを容易にする媒体となる。

具体的には、人口約1万4千人の町でデイサービスとホームヘルプ、そして居宅介護支援を提供するNPO法人の施設において食をテーマとしてカフェを実施し、当該法人の職員や近隣住民、町内の介護事業所の職員、など、のべ65人の参加を得た。カフェの実施方法として、毎回、研究分担者ならびに関連の専門職者が情報提供を行った後、テーマについて自由に話合った（ダイアログ、クロストーク、等）。

終了後、参加者を対象に取り組みの効果を明らかにするための調査を実施した。

研究成果の内容

1. 毎回、カフェ終了後に参加者からフィードバックを得るため、アンケート用紙への記入を求めた。結果の概要は、以下のとおりである。

(1) カフェが参加者に提供したもの

- ・初対面の人と話す場
- ・普段話す機会のない人と話す場
- ・人の意見を聞いて自分の意見も言う機会
- ・人と話すことで自分の気持ちや考えをあらためて知るという経験
- ・大勢の人が共通の話題について話すことで多くのことを学ぶという経験など。

(2) 参加者が得たもの

- ・新しい知識
- ・自分や家族の今後の生活の参考になる情報など

(3) 参加者が今後カフェに期待すること

- ・知らないことについて学ぶ機会の提供
- ・普段はつながりのない人と話す場の提供
- ・今までつながりのなかった人と知り合う機会の提供など

今回の取り組みは、地域住民が出会って横のつながりを形成する場を提供し、それらの人々が設定されたテーマや課題について、立場を越えて話し合うことを通して課題の現状についての理解を深め、さらに、地域域で実践する専門職者（特にホームヘルパー）の啓発・資質向上の機会となった。

2. 総合的な成果のとりまとめについて

今後、参加者を対象として質問紙による調査を実施し、回収した調査票から得られたデータを分析し、ダイアログやクロストークの効果など取り組みの成果について、より詳細に検討・考察を行う。この結果については、本学紀要等

を通して公表する。

3. 冊子の作成について

食をテーマとして実施した6回のカフェの内容をまとめた冊子を作成した。

この冊子を、在宅介護サービスの利用者とその家族、地域住民、関係事業者や保健・医療機関、行政機関、などに配布する。食の充実は生涯にわたって取り組まなければならない課題であり、今回の取り組みの成果を、冊子を媒体として地域に還元することは、広く住民の健康増進と介護予防に貢献するものである。